

群 教 七	G01- 02
	平25.251集
	小・国語

# 叙述を基に 想像を広げて読む力を伸ばす指導の工夫

— 交流を活かした音読劇づくりを通して —

特別研修員 古橋 和明

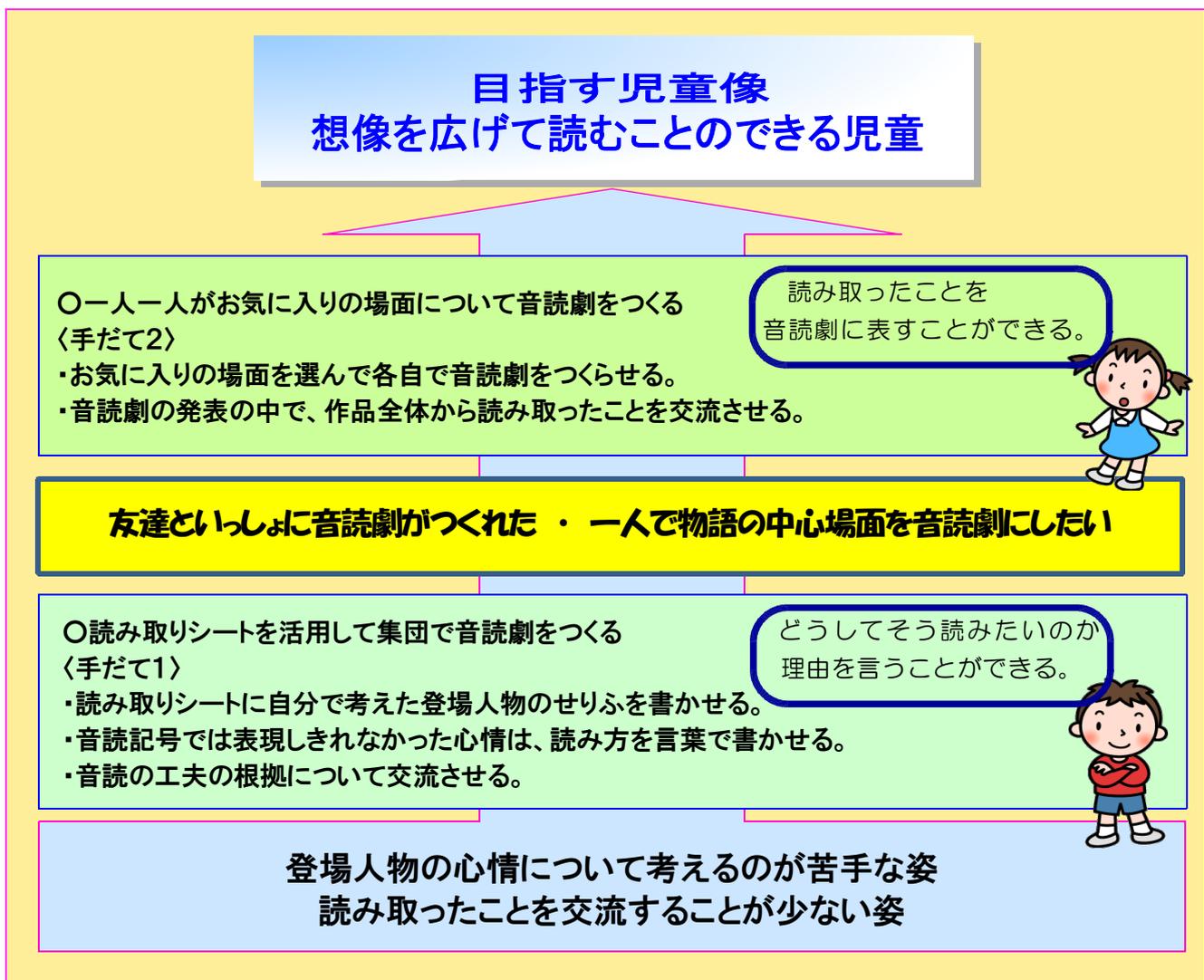
## I 主題設定の理由

本学級の児童は、物語文を読むことへの学習意欲は大変高く、読書の時間には物語を楽しそうに読んだり、物語を読んで考えたことを意欲的に発言したりする姿が見られる。また、表現活動を大変好み、自分たちでつくった劇を見せ合い、楽しむ姿も見られる。しかし、一人一人が読み取ったことの単発的な発表に終始することが多く、登場人物の心情について深く考えたり、自分の読み取ったことを友達と交流して深めたりする熟考の姿が少ない。この「人物像を表す叙述に気付き、想像を広げること」は、はばたく群馬の指導プランでも、県全体の課題として挙げられている。

そこで、叙述を基に想像を広げて読む力を高めるために、音読劇づくりを手だてとして取り入れることとした。児童は音読劇づくりの中で音読で表現する際の読み方の工夫を考え、その根拠について友達と交流する。その中で、自分では気付かなかった友達の読みに触れ、自分の読みを叙述に即して再考し、深めることができるであろう。このような考えから上記の通り主題を設定するものである。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手だて

単元「音読劇をつくって発表しよう」（教材名「ごんぎつね」第4学年・2学期）において、単元を貫く言語活動として音読劇づくりを設定し、以下の点に留意して実践を試みた。

### 実践1における研究上の手だて

- 読み取りシートを活用して集団で音読劇をつくらせる。
  - ・ 読み取りシートに音読の工夫と自分で考えた登場人物のせりふを書かせる。
  - ・ 音読記号では表現しきれなかった心情は、読み方を言葉で書かせる。
  - ・ 音読の工夫の根拠について交流させる。

場面の移り変わりに即し登場人物の言動や気持ち、関係の変化について考えることをねらいとする単元である。その中に個人で読み取ったことを活かし、集団で話し合っただて音読劇づくりをする活動を位置付けた。

音読劇づくりをする過程で、児童は登場人物の心情につながる表現に目を向けながら音読の仕方考えた。さらに、音読記号だけでは表すことが難しい叙述については、言葉でその読み方を書きこんだ。話合いの中では、自分の音読の根拠が言えたり、一人一人の感じ方に違いに気付いたりすることもできた。実践1においては、集団での話合いを通して音読劇にする場面や音読の仕方を決め、音読劇を完成させたが、想像を広げて読む力をさらに高めるために、児童一人一人が物語の中での大切な場面に目を向けることが必要であると考えた。そこで、次単元「お気に入りの場면을音読劇で表現しよう」では、次のような手だてを加え、改善した。

### 実践2における研究上の手だて

- 児童一人一人に自分のお気に入りの場面について音読劇をつくらせる。
  - ・ お気に入りの場面を選んで音読劇をつくらせる。
  - ・ 音読劇の発表の中で、作品全体から読み取ったことを交流させる。

作品全体から感じる自分の読後感がどの場面のどの表現からのものかを考え、それらに着目しながら音読劇をつくるのがねらいである。実践1の考察を踏まえ、児童一人一人がお気に入りの場面を選び、音読の仕方を考え、音読劇を完成させる活動を位置付けた。児童は、自分の読後感が伝わるお気に入りの場面を選び、その根拠を発表することができた。また、自分が選んだ場面の中でどの表現が自分の読後感の基になっているかを考え、そうした表現を中心に音読の仕方考えることができた。完成した音読劇を発表し合う中では、自分一人では気付かなかった友達の読みに触れ、読みを広げる姿が見られた。

## III 研究のまとめ

### 1 成果

- 音読劇を手だてとして叙述を繰り返し読みこませること、読み取った内容について音読で表現し交流させることで、児童は登場人物の心情等について叙述を根拠に主体的に考えた。また、それは、読み方の表現の工夫から、想像を広げて読んでいる姿として見取ることができた。
- 音読劇づくりの過程での交流や、できあがった音読劇を発表し合うことを通して、児童は物語を読んで感じ取ること一人一人異なることや、自分の読みを深めるために友達と交流することが大切である、と気付くことができた。

### 2 課題

- 読み取ったことを書きこむための読み取りシートについては、ねらいと実態に即して、共通場面を取り上げたり、児童個々に選択させたりと、工夫して提示する必要がある。

### 3 提言

- 音読劇を手だてとした読みを他教材にも広げたり、「書くこと」「話すこと聞くこと」のねらいと複合領域化したりして、継続的に実践することが、想像を広げて読む力の伸長に有効である。

IV 実践及び改善の実際

実践 1

1 単元名 「音読劇をつくって発表しよう」 教材名 「ごんぎつね」(光村図書4年下)

2 本単元及び本時について

本単元は、場面の移り変わりに即し登場人物の気持ち、関係の変化を考えながら音読劇をつくることを通して、想像を広げて読むことができるようにするものである。本時は全11時間計画の9時にあたり、登場人物の気持ちが伝わる言葉や読み方を考えることがねらいとなる。以下のように研究上の手だてを具体化した。

3 授業の実際

本時のねらい 登場人物の気持ちや場面の様子を想像して、音読の仕方を考えることができる

本授業実践の前に実践した音読劇づくりでは、音読の工夫を記号化し読み取りシートに記入、その根拠について交流させた。その際、間や強弱といった工夫だけでは表現しきれない、児童個々が読み取った登場人物の心情を、教師がいかに見取っていくかに課題が残った。そこで、本実践では、兵十のせりふの一部を児童が考える活動を設定したり、音読記号だけでは表現し切れない読み方の工夫点はどんな心情・様子等を表現したいのか、言葉で叙述に書きこむ活動を取り入れたりした。

読み取りシートを使って兵十のせりふを考えている様子

○ 兵十のせりふの一部が空欄になっている読み取りシート(図1)を配布し、ごんを撃ってしまった兵十の気持ちがわかるせりふを考えることを説明した。

S1: 兵十のせりふで書いていないところがあるよ。

T: どんなせりふを入れると兵十の気持ちが伝わるか考えて、兵十のせりふを考えましょう。早く書き終えた人は、実際に音読をしながらその読み方も考えましょう。

「ごんぎつね読み取りシート」 音読記号  
その明くる日も、ごんは、くりを持って、間(〜) 強く||  
兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置でなわをなっていました。弱く...言葉で  
それで、ごんは、うちのうら口から、ごんが中へ入りました。  
そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ  
入ったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあの  
「ごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。」  
「よし。」  
強く読んで兵十の怒っている気持ちを表そう。  
兵十は立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って、  
火薬をつめました。そして、足音をのばせて近づいて、今、戸口を  
出ようとする「ごんを、ドンとうちました。」  
ごんは、ぱたりとおれました。く  
早く読む  
兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりが  
固めて置いてあるのが、目につきました。  
「おや。」  
児童が考えた兵十のせりふ  
と、兵十はびっくりして、「ごんに目を落としました。」  
○「神様がくれたかと思っていた。もしかして、ごんがくれたのか...」  
○「ごんは、ぐったりと目をうつろったまま、うなずきました。」  
○「ごんは、火なわじゅうをぱたりと取り落とししました。」  
弱く悲しそうに読む  
青いけむりが、まだ戸口から細く出ていました。

図 1

児童が考えた兵十のせりふについては全員が考えたものを認め、よりよく考えた上で全員の考えを音読に取り入れ発表するよう伝え、音読の仕方を考えさせた。

音読劇に備えて音読の仕方を考えている様子

○ 前回の音読劇づくりではどのような工夫をしたかを挙げさせ、既習事項の活用を促した。また、工夫の視点を全体で共有することで、個々の児童が考えやすいようにした。

T：間や強弱だけでは表せない登場人物の気持ちを表すにはどんな工夫をすればよいですか。

S1：どんな気持ちで読むかを言葉で書けばよいと思います。

○ 音読の工夫を考える際は文全体について工夫を考えるのではなく、大切だと思ふ言葉に絞って工夫を考えるよう指示し、図2のように個人で追究させた。

S2：こないだうなぎをぬすみやがった。あのごんぎつねめが、の所は兵十の怒っている気持ちを表したいから強く読もう。

S3：ごんは、ぐったりと目をつぶったまもうなずきました、の所はごんが死んでしまいそうなので、ゆっくり悲しく読みたい。

S4：兵十は、火なわじゅうを、ぼたりと取り落としました、の所は兵十の驚きと後悔を表したいから強く読みたい。



図2

音読の仕方をなかなか考えられない児童には、どの場面のどの言葉が大切だと思うか、その時の登場人物の心情を表すにはどんな工夫がふさわしいかを考えさせた。全員が音読の仕方を考えた後、考えを交流して音読劇をつくらせた。話し合いでは、班ごとに司会を決め、自分が考えた音読の仕方とその理由を発表することとした。

### 班で交流して音読劇をつくっている様子

○ 児童が考えた兵十のせりふとその根拠について話し合わせることで、音読での表現が、読み取った心情からくるものであることを意識させた。

S1：ぼくは、兵十がごんを撃ってしまって後悔している気持ちを表したいから「ごん、おまえだったのか。神様と正反対の、ごんだったのか」というせりふを考えました。

S2：私は兵十がごんに感謝している気持ちを表したいから、「毎日栗や松たけをくれたのはごんだったのか。ありがとう」というせりふを考えました。



図3

○ 音読の工夫とその根拠について図3のように話し合わせた。その際、実際に音読表現をさせながら話し合うようにさせた。また、班で話し合っただけで決めた音読の仕方を読み取りシートにそのまま書かせ、音読劇の台本作りにつなげた。

S3：兵十は、火なわじゅうをぼたりと取り落としました、の所は、兵十の驚きと後悔を表したいから強く読みたいです。

S4：ぼくも兵十の後悔を表したいと思いました。でも、考えた工夫は違って、弱く悲しそうに読もうと思いました。

S3：同じ気持ちを表しているのに考えた工夫は違うんだね。

本授業のまとめの過程では、学習活動全体の振り返りをさせた。その中には「友達と話し合うと、自分だけで読んでいた時より登場人物の気持ちがわかった」「同じ気持ちを表したいのに、考えた読み方の工夫が友達と違って驚いた」という発言があった。叙述の表現から読み取ったことから登場人物の心情、そして、一人一人の感じ方は多様であることに気付いたことを称賛し、まとめとした。

#### 4 考察

○ 一人一人が音読の仕方を考えてから話し合いをさせたことで、根拠を示しながら話し合うことができた。その結果、同じ叙述から読み取ったことの異同を感じたり、友達と補い合ったりしながら、登場人物の心情について多様に考えることができた。集団で思考を深め、想像を広げて読むことができたと言える。

## 実践 2

1 単元名 「お気に入りの場面を音読劇で発表しよう」 教材名 「初雪のふる日」(光村図書4年下)

### 2 本単元及び本時について

本単元は、場面の移り変わりに即し登場人物の気持ちの変化や情景について考え、音読劇づくりを通して想像を広げて読むことができるようにするものである。本時は全8時間計画の第3・4時あたり、読後感が伝わるお気に入りの場面を選び、音読の仕方を考え、音読劇を発表し合う中で作品全体から読み取ったことを交流し、想像を広げて読むことがねらいである。以下のように研究上の手だてを具体化した。

### 3 授業の実際

**本時のねらい 読後感が伝わるお気に入りの場面を選び、音読の仕方を考えることができる。**

実践1における集団での音読劇づくりは、児童が、自分の読みで足りない部分を友達と補い合いながら想像を広げて読む、というものであった。今回の実践では、一人一人の児童がさらに想像を広げて読む力を高めることができるよう、読後感(自分が物語を読んで心に残った感じ)の基になっているお気に入りの場面を音読劇の範囲として自分で選ぶこととした。自分が選んだ場面について、既習事項を活かしながら音読の仕方を考えるとともに、できあがった音読劇について発表し合う中で、作品全体から読み取ったことを交流する活動を設定した。

#### お気に入りの場面を選び、その根拠を発表している様子

○ 音読劇をつくる範囲や音読の仕方を全て自分一人で考える、自分だけの音読劇づくりをしよう  
と児童に投げかけ、お気に入りの場面とその根拠を発表させた(図4)。

S1: ぼくの読後感は「怖い感じ」で、怖いと感じたのは3・4場面のうさぎの歌です。だから、ぼくが音読劇にしたいのは3・4場面です。

S2: ぼくも音読劇にしたいのは3・4場面です。でも、読後感は違って「どきどきした感じ」がしました。ぼくがどきどきしたのは、女の子が「よもぎ」と唱えようとしてもうさぎがわざと邪魔をして歌を歌い出したところです。

S3: 私が音読劇にしたいのは3・6・7の場面です。私の読後感  
は「怖い感じ」と「不思議な感じ」で、3のおばあさんの話が怖い感じがして、6・7でよもぎのなぞなぞを考えたり、よもぎの歌を歌ったりして女の子が助かったのが不思議に思ったからです。



図4

音読劇にする場面を選ぶのに戸惑っている児童には、自分の読後感を振り返らせ、その読後感がどの場面に基づいているのかを考えさせた。また、音読劇づくりをする時の工夫やポイントを振り返らせた。児童からは、「間」「強弱」「はやく読むところをつくる」「記号で表せない気持ちは言葉で読み方を書く」という既習の音読の工夫が挙げられた。自分の読後感の基となっている表現を中心に音読の仕方を考えるように指導した。

#### 音読劇に備えて音読の仕方を考えている様子

○ 音読劇づくりをする時にはどんな音読の仕方の工夫があり、どんなポイントがあるかを考えさせた。また、自分の読後感の基となっている表現を中心に音読の仕方を考えさせ、考えた工夫を読み取りシートに記入させた(図5)。

S1: うさぎが歌っているところは怖い感じを出したい。だから、「止まっちゃいけない。後がつかえる。かた足、両足、とんとんとん。」のところは低くて暗い声で読もう。女の子が「よもぎ」と言いかけたのをかきつけたうさぎたちの歌はもっと怖い感じを出したいから、暗くて大きな声で読もう。

S2：女の子がおまじないを唱えようとするのにうさぎの歌につり込まれてしまうところは怖い感じを表したいから、暗く読もう。

S3：「うさぎの白は、春の色 よもぎの葉っぱのうらの色、かた足、両足、とんとんとん」という、うさぎたちの歌は、怖い感じではなくて、不思議な感じや女の子が助かって安心しているような気持ちを出したいな。だから、強く明るい調子で読もう。



図 5

第4時には、前時につくった音読劇の発表をした。自分がどんな読後感をもっていて、それを伝えるためにどんな工夫をしたかを発表させてから、音読劇の全体を表現させた。音読劇の発表を全員がしたところで、お互いの発表を見て、最初よりよく分かるようになったことや考え方が変わったところがあるかについて話し合わせた。

### 作品全体から読み取ったことを交流している様子

○ 音読劇を見せ合い、作品全体について、最初よりよく分かるようになったことや、考え方が変わったところを中心に話し合わせた(図6)。

S1：ぼくは、よもぎのおまじないが言えなくて逃げられない「どきどきする感じ」を表したかったけど、友達の発表を聞いて、同じ場面でも「どきどき」だけではなく、「さびしい感じ」「怖い感じ」「明るい感じ」のところもあることがわかりました。

S2：私も、最初の読後感は「不思議な感じ」だったけれど、みんなの発表を聞いて、「怖い感じ」「さびしい感じ」「少し明るい感じ」が心に残りました。特に「少し明るい感じ」がしたことが心に残っています。その理由は、最後のほうの場面で春のことがでてきていたからです。

S3：ぼくは最初雪うさぎの歌があったから「怖い感じ」がしていたけど、友達の発表を聞いていたら、雪うさぎが女の子を本当に世界の果てまで連れて行ってしまおうような気がして、ますます「怖い感じ」がしました。

S2：私は自分の読後感が「怖い感じ」と「不思議な感じ」だったけれど、友達の発表を聞いていて、自分がやっていない場面で、自分と同じ「怖い感じ」や「不思議な感じ」という読後感をもった人がいたので、色々表現できるのだなと思いました。

S1：ぼくも、友達の音読劇の発表を聞いて、考えたことがあります。自分の最初の読後感は「どきどき」だったのだけれど、それに決めつけてしまうとおもしろくないなと思いました。逆に、自分の読後感だけではなく、他の人の読後感も参考にすると、読み方の世界が広がるんだなと思いました。



図 6

本授業の学習感想としては、「一人で最後まで音読劇をつくって発表できてよかった」「友達と見せ合うことで、自分の読み方がもっと深くなることがわかった」という感想が出された。自分だけで音読劇が作れたという達成感も感じられた。

#### 4 考察

○ どの児童も自分の読後感が伝わるお気に入りの場面を選び、その中で読後感につながる表現を中心に音読の仕方を考え、自力で音読劇をつくることができた。また、音読劇を発表をし、作品全体から読み取ったことを交流する中で、自分では気付かなかった友達の読みに触れ、登場人物の心情等についての読みを深めることができた。想像を広げて読む力が伸長したと言える。